

## 58 《老婦人の肖像》 ジョルジョーネ

### 《教訓画：時間とともに》

2023

真鍋友範



《老婦人の肖像》 68×59 ジョルジョーネ アcademia美術館

### 1 背景

作品サイズは、《嵐》同様に小作品だ。貴族や商人の室内に掲示されるサイズであり、宮殿や公的空間には向かない作品だ。

見た目はズバリ老婦人の肖像画のように見える。だから、ざっと見て、題名の《老婦人の肖像》には何ら違和感はないだろう。

しかし、老婦人の仕草に注目すると、自分自身を見るよう、その右手を胸に押し当てて指している。

また、その手には紙切れが握られている。《コル・テンポ》(時の流れとともに)

しかし、肖像画と呼ぶには、奇妙だ。

確かにルネサンス期の通常の女性肖像画においても、手に何か小物を持っている肖像画は目にすることがある。

しかし、肖像画において【特定の意味を込めたメッセージ性のある文字の書かれた紙切れ】を手持つことは、かなり珍しい。当然そこにテーマが隠れていると考えるのが普通だ。

では、この紙切れに書かれた教訓的な文字内容は、何を言おうとしているのか。描かれた老婦人の顔の表情(容姿)を見れば、時間経過によって現在の姿がある、と読み取れる。時間経過とともに現在の姿になった、と読める。

ジョルジョーネは老婦人を描こうとしたのではなく、【時間経過による容貌の変化そのもの】を具現化させることにより、逆に【今、現在を大切にせよ、との教訓】を描いているのではないか。

この絵画は、【時間の大切さを教訓とする】テーマにした、当時のルネサンス期イタリアにおいては、あまり見かけないテーマの絵画であった。

宗教色はなく、むしろ北方のネーデルランドで16～17世紀に流行した《教訓画》の影響が感じられるのだ。

当時のネーデルランドでは、人生における教訓を描いた風俗画が流行していたが、その黎明期である16世紀に、北方の注文主によってジョルジョーネ工房に注文され制作された結果ではないだろうか、というのが私の仮説だ。

当時のヴェネツィアの国際都市として位置づけからも、イタリアのみならずヨーロッパ各地との交易により、イタリア地域で好まれるテーマとは異なった【教訓画】が、遠方であるネーデルランド地方から注文され、作品が生まれる背景があったと理解されるのではないか。

## 2 ジョルジョーネの時間感覚

ジョルジョーネの絵画作品には、特徴がある。彼のいくつかの作品は、いわゆる《追悼画》と分類される。宗教画でも、肖像画でもない。

まず、個人によって注文された《追悼画》の特徴を再認北方識しよう。

《嵐》では、遠く離れた夫と、乳飲み子を傍に立たせた妻が、其々亡くなった兵士、ビーナスとなった女として左右別々の時間空間が合成表現されている。登場する夫と妻（ビーナス姿）は、互いに直接には見えていない。夫は遠い故郷の街の妻子を心配するが、もう今は戦い破れ亡くなっている。妻も、というか戦地の夫を気遣うが、既に戦乱で亡くなり、ビーナスとして表現されている。つまり亡くなった家族の思い出の具象化を目的に、依頼者の貴族がジョルジョーネに対して《追悼画》を注文し、ジョルジョーネが画面合成によって、時間・空間を表現した家族愛の物語なのだ。

また、《人生の三世代》もまた【時間合成画】だ。

右側のイエスは、中央の弟子に向かって、『そこにあるように、』と手首を小さく回しながら書類の一部を説明している。右端の高位聖職者である赤い服のレオ10世は、『私もその教えに従いたい』、との意思を示している場面だ。【何世紀もの時間差を同時に一つの場面に合成表現されている。】



《嵐》



《イエスの導くごとく、我也導かん》：人生の三世代

このように、《追悼画》においては、異なる地点や異なる時間がジョルジョーネの天才画面合成の才能によって、創造的に表現されているのだ。

《嵐》や《人生の三世代》（イエスの導くごとく、我也導かん）のように、ジョルジョーネには、【一枚の画面上で異なる時間の場面を同時に表現する工夫がある】のだが、このことは、ジョルジョーネには、【時間】というものを画面の中で自由奔放に表現したいとする願望が隠れていたと推察できるのだ。

この辺りは、動画表現が進化した現代では、想像するのは難しいが、16～17世紀においては、【固定した絵画面面に、動画世界を合成創造するジョルジョーネの才能】は、特筆されるのだ。

このジョルジョーネの持つ時間表現への関心こそ、ジョルジョーネ工房の《老婦人の肖像》と現在はネーミングされている《教訓画：時間とともに》の制作依頼の受託につながったと理解できるのだ。

この【時間の流れへの表現意欲】は、ジョルジョーネの人生の最終期の場面において、弟子ピオンボが師匠であるジョルジョーネの手法で描いた《三人の哲学者》（船主への追討）において、異なる時期の同じ人物を同時に表現するという、画期的で伝統的な表現においても、実践されているのだ。



\* 描かれているストーリー：【手にコンパスと直定規を持つ、造船設計者（船大工）に憧れた若者は、成長し、白いターバン姿の船主になったが、近年の船上での争い、あるいは嵐による難破により、傍らに立つひげ顔の船長とともに亡くなった。】という、依頼した貴族の個別の家族史が【追悼画】として描かれている。（描かれているのは三人の哲学者、では無く、あくまで一人の人物の追悼画。哲学者たちという解釈は誤りだ。亡くなった人物たちを田園風景の中に配置するのもジョルジョーネ流《追悼画》の共通特徴）

\* 若者と亡くなった船主は、数十年の時間差がある同一人物という設定だ。

\* 若者の顔色は白く鮮明だが、船主らの【顔は暗く不鮮明な表現】で、亡くなった人物であることが分かる。これは、《嵐》の兵士や、《羊飼いの、礼拝》の中央人物、《田園の合奏》の絃楽器を弾こうとしている人物の顔の表現と同じジョルジョーネ流の《追悼画》における【追悼対象者の顔】表現だ。

### 3 制作年

この作品が描かれた正確な制作年は不明だ。少なくともジョルジョーネの亡くなった1510年よりは早い時期と考えられる。

つまり、北方に関連する注文主により、ジョルジョーネ工房に注文された《老婦人の肖像》【教訓画】という位置付けになるのだが、ジョルジョーネ自身は《教訓画》への興味による発展的連作には結びつかなかったと推測できる。

当時の習慣からも、ジョルジョーネが実験的絵画を制作することはあり得ず、あくまで、北ヨーロッパの注文主からの稀な依頼で描かれた《教訓画》が、本作品であったと推測される。